

浅間塚築上文書にみる近世の木間ヶ瀬

石田年子

はじめに

野田市木間ヶ瀬・羽貫地区にそびえる浅間塚は十メートル余の高さがあり、その歴史も古い。現在ではこの塚の由来を知る人も少なく関心も薄れているようであるが、戦前までは七月一日の初山には子供の健康を祈る村人達で賑い、多くの露天が軒を連ねた。

頂上に立つ浅間碑は明治十二年（一八七九）の造立で、時の陸軍大将・有栖川熾仁親王による「浅間神社」の揮毫が刻まれ、下部には富士山が浮き彫りにされている。下段にある多くの寄附連名碑や記念碑も同時期に建てられたもので、当時の木間ヶ瀬村の総力をあげた築塚であることが感じられる。

塚の中腹に設けられた階段脇には、これらの石碑とは年代の異なる天明三年（一七八三）造立の角柱が二基建っており、一基には「木間ヶ瀬邑 岩本治平祐直 天明三卯歳六月吉日」の銘がある。他の一基も当村の村人数名と、それぞれ金百足の寄付金が刻まれ、明治期の浅間塚造立から百年も遡る石造物であることが分かる。



木間ヶ瀬羽貫・富士塚



頂上の浅間碑

塚中の碑文にも明記されているが、実はこの浅間塚は当時の名主・岩本治平祐直の発願で天明二年（一七八二）三月に築かれたもので、明治十二年（一八七九）の築塚は従来の塚が暴風で倒壊したため再建されたものようである。

天明期の塚がどの程度の規模であったかは不明であるが、この初期の浅間塚の造立に関わる記録（「富士浅間あま屋石かき建立奉加帳」等）が、先の岩本家所蔵の古文書中に記されている。時代的には、江戸市中に富士講が急速に広がる時期で、安永八年（一七七九）に丸藤講の祖・高田藤四郎が戸塚町（現・新宿区西早稲田）に富士講として最初に浅間塚（通称・高田富士）を築いてから三年後のことである。高田富士の出現後、これに習って多くの塚山が関東平野一円に続々と築かれていくことになるのであるが、木間ヶ瀬村の浅間塚造立は極めて早く先駆的な時期といえる。

残された当時の築塚の記録を読み解くことによって、当時の村人の信仰心や江戸近郊の木間ヶ瀬村の経済状況などを考察できればと考えている。

一 野田市周辺の富士信仰

秀峰富士の華麗な姿を朝に夕に仰ぎつつ生活してきた利根川中流域の人々の富士信仰への歴史は深い。古くからの富士山御師であった上文司家に残されていた「上文司重長旦那帳」が、山梨県・富士吉田市刊行の『富士吉田市史資料編第五巻』に収録されている。これは慶長八年（一六〇三）の作成で、当家の旦那場の地域名と氏名が記載されているものであるが、その中に利根川中流域の武州忍領などに混ざって、関宿町の寺院四軒と人名十六人が記されている。明けん坊、たき本坊、龍源院、神宮寺など現在まで残っているものは見当たらないが、筆頭の人名に大谷太郎右衛門尉という名があり、江戸期に関宿台町において名主職を務めた大屋家である可能性が考えられる。この事から、すでに中世において関宿地域では富士山への登拝が行われていたことが分かる。

また、江戸中後期より江戸市中に広がる富士講は、関東一円の農村部にも枝講を作って勢力拡大を図ったことから、江戸文

化がストリートに伝わる野田市域にも、宝珠花河岸の丸宝講を筆頭に九講もの講社が結成され、瞬く間に信仰の厚い富士講圈となっていた。活発な活動がおこなわれた証として、市内には江戸末から明治にかけて造立された多くの富士塚が今も残っている。



描かれた高田富士

1. 浅間塚造立の背景

木間ヶ瀬村で浅間塚の築塚が行われた天明二年（一七八二）といえば、富士行者として熾烈な修行を積んだ食行身祿が、庶民救済と世直しを願って富士山の烏帽子岩で入定した享保十八年（一七三三）以降に、その遺志を継ぐ弟子達の布教活動により江戸市中に広がった富士講が、江戸近郊の農村部にも講組織を拡大していく時期である。安永八年（一七七九）には身祿の弟子であった丸藤講の祖・高田藤四郎が、富士山に登拝出来ない老人や病人、女性や子供達のために戸塚町（現・新宿区西早稲田）に富士塚（通称・高田富士）を築いて話題となっていた。

このような江戸市中での富士講の広がりが高田富士の造立は、木間ヶ瀬村の人々にも大きな影響を与えたと推測されるが、

それにして藤四郎の浅間塚造立から三年後に早々と塚を築いた木間ヶ瀬村の動きは極めて迅速で先駆的である。残された奉加帳の裏面に書かれた「富士山乃高鷹木坂 築上て所繁昌 富貴萬福」のスローガンは、浅間塚を築いた後の地域繁栄への期待に溢れている。

2. 浅間社の由来

岩本治平祐直が浅間塚造立を提案した場所は、木間ヶ瀬地区・白山神社に隣接する浅間久保と称される地で、古くから浅間社が祀られていたという。出典は不明だが郷土誌『木間ヶ瀬の歴史』中に記された由緒によれば「文武二年（六九八）大早魃に際し雨乞い祈願の為村民戮力して創建す、浅間久保の名これより起る」とあり、天明朝の塚の造立は浅間神社の再建ということになる。

同浅間塚中腹に嵌め込まれた明治十二年（一八七九）作成の「浅間祠重修記」にその経緯が詳しく書かれており、『木間ヶ瀬の歴史』に掲載されている碑の読下し文を左記に記す。



浅間塚中の由来碑

【浅間祠重修記】

下総国葛飾郡木間ヶ瀬村に浅間祠一字あり 其創始歲月未詳なりと雖も郷人其地を称して浅間窪となす即ち由来する所の久しきを知るべし 然して既に窪を以て呼べば即ち其地汗陋観るに足るべきものなきは推して知るべき也 天明二年春郷豪岩本祐直之を患え衆と謀首し数千金を捐て土山を起し富士山に擬し祠を其頂に建つ 比に於て人々始めて仰瞻の念を起し壇為に尊し 爾来多く年所を経明治十年十月十一日に至り偶々暴風あり祠宇傾壊す祐直五世の孫祐孝深く祖志の地に墮つるを慨き改作す所あらんと欲し諸祠掌及郷友に議す 人々皆嘉し之を口ず祐孝乃ち奮つて業に就く 隣里慈善の人之を喜び請はずして乗り援くる者數十人奮を担ぎ糞を荷し忽ち増築する土山一丈余 往時呼んで窪となせし者□として丘となり四方眺瞻の觀始めて全し 祐孝己に能く祖志に酬ゆ又後年或は今日の災あらん事を慮り因て其の由を石に勒し以て諗來る比の如し 明治十二年夏四月 庵老人栗本鋤雲識

木間瀬柔三書

二 岩本家・築塚文書について



天明三年の石塔

岩本家は、市内の東金野井地区に現在も城の遺構が残る、鎌倉時代の御家人・野本将監家定の家臣であったと伝わる旧家で、後に帰農して木間ヶ瀬村の名主を永年務めており、村に関わる文書を多く保存していた。近年、当家が他所へ移転するに際し、これらの文書を野田市に寄贈されたことから、現在は市の所蔵となっている。

岩本文書は享保期から明治初期までの百五十年間に作成された四百七十点余からなるが、主に江戸中後期の岩本治平祐直が名主を務めていた時期のものが中心である。なぜか宝珠花村関連の文書も多く見られ、これは戦前の村史作成の折に何らかの動きがあったのではないかと推察される。

筆者が今回取り上げる文書は、天明二年（一七八二）・三年（一七八三）の木間ヶ瀬村浅間塚築山に関わるもので、木間ヶ瀬村各戸の人力と資金協力の記録である「富士浅間山築上人足帳」。「富士浅間あま屋石かき建立奉加帳」と、浅間塚完成後に行った富士浅間本宮での太々神楽奏上時の寄付連名である「富士山太々神楽奉加帳」、岩本治平祐直が私的に行った浅間神社（浅間塚）への社殿・鳥居・石垣などの奉納物の詳細を記した「下モ浅間一字并鳥居惣石がき・毘沙門手洗石奉納帳」の四点である。

1. 願主・岩本治平祐直について

岩本家については先に述べたが、今回取り上げる羽貫・浅間塚造立の願主である岩本家当主は岩本治平祐直である。祐直は享保十五年（一七三〇）に岩本家に生まれ、幼い頃より学問を好む信仰心の厚い人物で、岩本家中興の主といわれている。

山岳信仰の行者は名前の中に「峯」「峰」を用いることが多い。そこで、祐直の父親である先代・岩本治平峯章は、その名から山岳信仰の行者であった可能性が考えられる。戒名が「養泉院涼月圓翁法師（墓石は圓翁居士）」で、晩年は出家してい

ることなどから、祐直の信心深さは父親の影響が大きいのではないかと推察される。

祐直は、享和三年（一八〇三）に七十三歳で隠居するまで永年にわたり木間ヶ瀬村の名主職を務め、文政六年（一八二三）三月に九十三歳で天寿を全うしている。戒名は彼の永い名主職への顕彰と長寿を表してか、「里正院磨賢松菴居士」とある。

岩本家に残る祐直の私的な文書で際立つことは、神社仏閣への多大な寄付と自身の信仰活動で、寛政三年（一七九一）三月に富士山御師の仲介で白川神祇伯より神主の許可を得ている。木間ヶ瀬村周辺に奉納されている石造物は、祐直によるものが多い。元は岩本家の氏神であった松ノ木天満宮境内の一角にも、壊れて積み上げられた石灯籠があり、その棹部分に「奉掛村内石橋三拾五ヶ所大願成就之所」「寛政三辛亥年六月廿五日岩本治平祐直」との銘がみえる。



治平の奉納灯籠

因みに、この灯籠は、祐直が私財を投じて村内の水路に三十本の石橋をかけることを誓願し、成就した記念の奉納物のようで、郷土誌『木間ヶ瀬の歴史』には、昭和期の橋掛け替え工事の際に、祐直が掛けたとみられる年号入りの石橋があららちらで発見されたという記述がある。このエピソードからも、当時の木間ヶ瀬村の人々が、名主・治平祐直に対して全幅の信

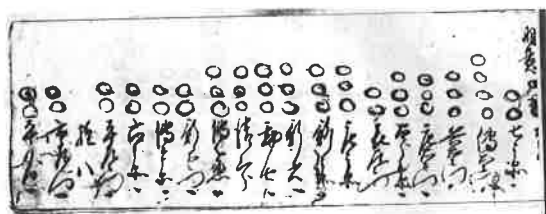
頼を寄せていたであろうことは容易に推測でき、彼の提案である浅間塚の造立に村が一丸となった理由が理解できる。

2. 「富士浅間山築上人足帳」について

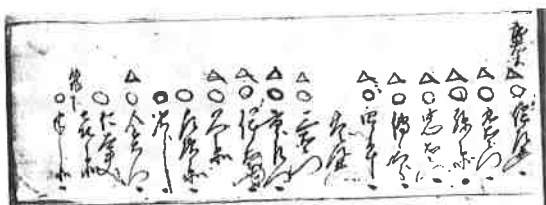
「富士浅間山築上人足帳」は表紙を含めて三十三頁からなる横帳の記録で、天明二年（一七八二）三月に作成されている。

（ア）人力奉仕の印

内容は左記の資料に、木間ヶ瀬村内十九の地区名と四百五十名の人名が記され、その上に丸・三角・点などの印がつけられている。この丸・三角・点は何を表すのかなどの説明書きがないため筆者の推測となるが、村民一軒が築塚工事の際に参加した日数の明記で、丸印が一日参加、三角印が半日参加、点はその他の協力となるのだろうか。全てを含めると表1に表したように延べ参加人足は七百十二人となる。



羽貫坪の人足帳



その他の坪の人足帳

村人は、人力奉仕も現金の寄付と同様に後の功德に繋がると考えていたはずで、この控帳も一種の奉加帳といえる。

当時の木間ヶ瀬村は、岩本治平と小沼左源太の名主二名で運営されており、浅間塚造立事業は白山神社の氏子を兼ねる北部地域と利根川べりの三地区を含む治平組（羽貫・高倉・武者土・飯塚・鴻巣・松ノ木・内野堤根・上納谷ヶ切・出洲檀築）が中心となっておこなっていたと考えられる。

（イ）羽貫地区の人力奉仕

この記録帳によれば、羽貫地区の延べ参加人足が七十九名と非常に多い。他集落では一軒に印されるマークが丸と三角一個ずつであるのに対して、羽貫地区では殆どの家が丸印二個をクリアし、丸印三個が十二軒、丸印四個が二軒と突出した参加人数を表している。これは、浅間塚の所在地が羽貫地区内であることと関係があり、浅間塚築塚工事はこの地区が中心となっておこなっていた可能性を感じる。

表中のNo. 16、No. 19は利根川べりの地域で、そこは猿島から江戸へ向う旅人達が利用した長谷の渡場があり、船頭町として栄えていた。記録帳に記された「だん津く」とは利根川に出来た中州の檀築島のことで、この島にも船頭を生業とする人々が多く住んでいた。

（ウ）木間ヶ瀬村の野馬囲

余談であるが、築上人足帳の最後尾に「野馬囲 家数三百八拾六軒 間数 七百六拾軒」と記されていることが目に止まる。永年、小金牧周辺の村々は、野馬土手を越えて侵入してくる馬によって農作物が荒らされる被害に苦しんでいた。野馬達は幕府直轄の牧に所属し、捕獲して牧に帰すなどの方策が禁止されており、防ぐ手立てがなかった。この状況は寛政四年（一七九二）に、幕府より房総三牧の野馬奉行として赴任した岩本石見守の政策によって解消されるのであるが、遡ること、天明二年（一七八二）の木間ヶ瀬村では野馬対策として、村周辺を高い柵などで囲っていた。

3. 「富士浅間あま屋石かき建立奉加帳」について



奉加帳

「富士浅間あま屋石かき」とは浅間塚を指すらしい。この控帳が制作されたのは先の築上人足帳の作成から四ヶ月後の七月で、地区ごとに記された寄付連名簿である。

(ア) 小字ごとの奉加帳

治平の発願に応じた村人達の奉加帳は地区(小字)ごとに作成されており、横帳で十九冊・百頁余が残されている。先の築上人足帳と突き合わせてみると、寄付が為されていないのに人足として参加している集落が二地区ほどあり、実際の奉加帳はもう何冊か存在していたと思われる。

(イ) 寄付総額

寄付総額は米が十五石四斗八升五合(読み取り不能の二十八軒分をプラスすると十六石以上)、麦が一斗八升、現金が一両三分五百八文余で、世の定説どおりに一石を一両と見積もると十七両を優に越える額となる。

木間ヶ瀬村の家数人別書上帳によれば、天明元年(一七八一)の総家数は五百二十軒、そのうち百姓家は四百三十六軒とある(『木間ヶ瀬の歴史』より)。寄付を現金で納めた羽貫地区を除く十八地区が米による寄付であることや、寄付総軒数が四百二十三軒であることを考えると参加者の多くが地元百姓家で、浅間塚の造立は村人総意の一大事業であったことが明白である。

また、治平組に属する地区の奮闘も目立ち、戸数が少ない割には一石以上の米を拠出している地区が多い。

表1. 寄付金額・延べ人足集計

No.	地区名	寄付軒数	参加人足	延べ人足	米	金銭	備考
1	武者土	14	16	25	一石四斗壹升	百五十文	治平組
2	高倉	13	12	25	一石七斗九升		治平組
3	飯塚	30	35	46	一石四斗八升	八百七拾八文	治平組
4	天神(前村)	19	15	27	八斗五升		治平組
5	松野木	19	20	26	六斗五升+不明八軒分		治平組
6	鴻巣	21	21	28	一石貳斗		治平組
7	羽貫	34	36	79		一両一分六百四十六文	治平組
8	内野堤根	26	28	52	七斗		治平組/川通
9	上納谷・ノ切	27	27	45	一石二斗七升	二百文	治平組/川通
10	外野・出洲	36	30	39	九斗壹升	五十二文	治平組/川通
11	檀築	不明	21	34			治平組/川通
12	新宿	36	35	51	一石五升	八十二文+不明分	左源太組
13	向ノ内	27	30	36	六斗二升+不明分	拾貳文	左源太組
14	小作	27	21	27	一石一斗一升	二十四文+不明分	左源太組
15	正久保	22	10	17	三斗九升+1 1軒不明分		左源太組
16	砂	22	34	50	八斗七升		左源太組
17	下根	34	25	43	九斗七升	百六拾四文	左源太組
18	大山	16	26	47	二斗壹升五合+不明分	三百文	左源太組
19	前堀	不明	9	15			左源太組
		225	451	712	十五石四斗八升五合+不明分	一両三分二朱八文+不明分	

天明三年（一七八三）七月に、上州・浅間山の噴火に端を發した天明の飢饉が起り、米価が異常な高騰を起すのであるが、この村にはまだその兆しは見られず、氣前よく寄付に応じている。

4. 「富士山太々神樂奉加帳」について

浅間塚の完成から一年後の天明三年（一七八三）三月に、山梨県の富士浅間宮本社で太々神樂を奉納しており、その折に作成した「富士山太々神樂奉加帳」が残っている。

（ア）太々神樂寄付

記載されている寄付戸数は寺院六軒を含めて百二十八戸である。百文以下の寄付戸数が外に六十一軒あったとメモ的に記されており、総人数は百六十六名で、寄付総額が十二両ほどである。

築塚時の人的協力と金銭の寄付、さらに富士浅間宮本社への太々神樂奉納の寄付については村人達の出費の大きさに驚く。しかし、この村の経済状況はこれらを容易にクリアする力があつたようである。

（イ）七観音建立奉加帳

木間ヶ瀬村の当時の経済状況を示す文書として、岩本家に残っていた「七観音建立奉加帳」がある。これは全国的に大飢饉であつた頃の天明五年（一七八五）六月に無量寿院に七観音像の丸彫りを建立した際の奉加帳である。この帳は途中で切れており全貌は分からないが、百六十六軒の村人達が一升から七升の米をそれぞれ寄付し、三石余の米を抛出している。天明の飢饉といわれるこの時期の米価は例年の三倍に上がっており、寄付米と一緒に集った金三両で充分に七観音像は造立できたとと思われる。石塔造立の理由は定かでないが、世間では未曾有の飢饉により米価高騰が庶民を直撃し、打ち壊しや大量の餓死者が出たりして石仏の造立どころではない時代なのに、この村は

違つていたようである。

5. 「下モ浅間一字并鳥居惣石がき奉納帳」について



奉納帳

「下モ浅間一字并鳥居惣石がき奉納帳」は、木間ヶ瀬村の講中が富士浅間宮本社に太々御神樂の奉納をおこなつた天明三年（一七八三）六月に、岩本治平祐直が私的に作成したものである。

（ア）浅間塚築塚への悲願

表題が「字浅間久保耕地―下モ浅間一字并鳥居惣石がき／尾崎村金嶋―毘沙門手洗石奉納帳 大願主 岩本治平祐直」となっていることから、完成した浅間塚上に祀るお堂や木造鳥居及び石垣などは祐直個人が自費を投じて奉納したことが分かる。内容は奉納物の制作状況、道具の詳細、費用などが記されている。また、末尾に「奉建立 為村中安全 子孫長久之 岩本次平」の文字が大書されていて、巨費を投じて浅間塚を築いた目的が分かる。

（イ）毘沙門天への奉納

尾崎村金嶋の毘沙門天といえは、かつては乳の出がよくなることの靈験で野田市周辺の産婦達の信仰を集めた寺院であつた。現在、毘沙門堂の前には祐直の奉納した大振りの手水石が置かれているが、木間ヶ瀬村とは距離がある毘沙門天に、なぜこの手水石を奉納したのかは現在のところ不明である。



岩本治平が奉納した尾崎・毘沙門堂

おわりに

筆者が旧関宿町の郷土史を学び始めた頃、この羽貫の浅間塚は天明の飢饉の際に、名主・岩本治平が村民救済の為に私財を投じておこなった公共事業だとの伝承があった。しかし、この大量の奉加帳や築上人足帳の解析から見えてきたものは、治平祐直の村の繁栄と平穏を願う心情に呼応し、浅間塚の築上を目指し、資金も人力も拠出しつつ団結する村民達の姿であった。

先に述べた祐直の父親である峯章は、浅間塚完成から一年後の天明三年（一七八三）三月十五日に浅間塚築塚の全てが終了したことを見届けた後に逝去している。浅間塚の造立は村の平和を願う峯章、祐直親子二代の悲願であったのかも知れない。

他市町村の歴史には、村役人と百姓達の反目する事例が散見されるが、古文書から見えてくる近世の木間ヶ瀬村は名主と村民の信頼関係が良好な村であったことが分かる。江戸末期にはこの村にも他の富士講組織も入り込んでいるが、当浅間塚は木間ヶ瀬村にとっては別格の存在で、丸木講という講組織として村と岩本家が守ってきたようである。

過日、筆者は埼玉県川口市の見沼舟運の通船堀閘門で名高い木曾呂地区を訪れた。ここには寛政十二年（一八〇〇）に当地の富士講によって築かれた木曾呂富士塚があり、富士塚としては初期の造立であることと、当時の形式がよく保存されていることが理由で、国の指定文化財となっている。実に木間ヶ瀬村の富士塚はこれより十八年も先に造られており、築塚に関わる文書も残されていることから考えると、貴重な文化財であることを認識した。

老婆心ながら、明治十年（一八七七）に起こった塚の崩落時には祐直から五代目にあたる岩本祐孝が中心となり村の総力を上げて再建にあたったが、もし再度崩壊する事態が起こったなら、地元に関心が薄く、子孫も去った現在、一体誰が再建の指揮を執るのだろうか。

今回の稿は知名度もない一村の浅間塚築塚に関する事で、これといった資料もなく手探りの状態で書き上げたものである。その中で、唯一といえる資料が木間ヶ瀬村の郷土誌『木間ヶ瀬の歴史』であり、この本の詳細な内容には感謝する外ない。鬼籍に入られた当時の編集者一同に心からお礼を申し上げる。又、野田市市史編さん室には貴重な「岩本家文書」の閲覧など多くの御協力をいただき、心から感謝申し上げる次第である。

【参考資料】

- 『木間ヶ瀬の歴史』関宿町教育委員会 S 五三
- 『富士塚考』竹谷鞠負著 二〇〇九
- 『富士講の歴史』岩科小一郎著 名著出版 S 五八
- 『富士吉田市史資料編五』富士吉田市史編さん委員会 一九九七
- 「野田市の山岳信仰③ 浅間塚が語る富士講の隆盛」『研究報告一一号』拙稿 二〇〇七

（いしだ・としこ 当館展示協力員）